

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第二十一卷 第四號

大正十四年十一月一日發行

論叢

整稅案の^{一缺點}としての負債利子の問題

法學博士 神戸 正雄

八幡船考

文學博士 新村 出

矢内原「アダム・スミスの植民地論」を讀
教授の^{以前}「アダム・スミスの植民地論」に就

法學博士 山本美越 乃

南京條約の^{以前}治外法權問題に就いて

文學博士 矢野 仁一

フッサールの現象學

文學博士 米田庄太郎

自殺統計論

法學博士 財部 靜治

時論

勞働組合法案を評す

法學博士 河田 嗣郎

說苑

リカルドの勞働價值法則の妥當性に就いて

經濟學士 森 耕二 郎

雜錄

近世の土地分給政策

經濟學博士 本庄榮治 郎

都鄙別による離婚率

經濟學士 岡崎 文規

（禁轉載）

説苑

リカアドに於ける労働價值法則の

妥當性に就て（三・完）

森 耕 二 郎

（B）以上私は、リカアド價值論の所謂修正に重きを置き、彼れの價值論は結局一種の生産費説として残つたものに過ぎない、とする二三の論者の説を挙げ、且つこの解釋の論據を供するが如き、彼れの書簡集およびその『原論』の諸版の間の差異に於て見出される彼れの態度を検討し、この解釋に遽に參ずことのできないことを瞭にした。ところがこの解釋に對して、リカアドの價值論は、その修正あるに拘はらず、依然として労働價值論として残つたのであるとして、その所謂修正に重きを置かざるものがある。

例へばローゼンベルグはこの點に就て左の如く云ふ。

『リカアドが價值法則よりの背離を承認したことは確である。更に彼がこの背離の射程を全く

認めなかつたことも確である。しかし吾々は、彼はこの背離をただ現實に對する讓歩として承認したのであると云ふことを忘れることができないし、又忘れてはならない。彼れの全體系は勞働價值の基礎の上に立ち、この「修正」を全く考慮の外に置いてゐる。若し第一章第四節及び第五節を抜くならば、この「原理」は、一つの章句に至る迄、依然として同じであつて、何等の修正をも必要としないであらう。若しリカアドに於て勞働價值法則を無視するならば、「原理」は全一の、論理的の全體たらずるに至るであらう。」

ドウニースも亦この解釋をされる一人である。彼は云ふ。

『この價值の測定單位がリカアドの支配的思想であることは、彼がその根本的原理に制限を加へたる後と雖も、猶且つそは、外見上、同じく絶對的に、地代、利潤理論の極めて重要な章句の裡に再現してゐる程である。』²⁾ (註)

(註) レグインスキーも亦この解釋をとる。

『リカアドが勞働費用に利潤率を加へたことは事實に相違ないが、しかし彼れの價值論が異なれる貨物に投ぜられたる勞働の分量以外の他の根據を持つてゐると推測するのは間違つてゐる。』³⁾

アシユレイは、『リカアドの復活』なる論文に於て、マーシャルがリカアドの價值論を生産費説であると解し、それはジェボンズ及び埃太利學派の效用價值説と必ずしと相撞着するものではないとすることに反對し、リカアドの價值論は、修正せられたるに係はらず、依然として勞働價值論の上に立つてゐることを主張する。アシユレイはその理由として左の三つを擧げて各々に就て詳さに述べてゐる。

(一) リカアドはこれらの修正が彼れの學說の本質に觸れるものとは考へなかつた、随つて彼はロードベルタスやアルクスが用

- 1) Rosenberg, Ricardo und Marx als Werttheoretiker, S. 29.
- 2) Denis, Histoire des systemes économiques et socialistes, Vol. II, p. 151.
- 3) Lewinski, Founders of Economics, pp. 111-3.

ひた言葉と區別することができない言葉によつてその學說を引き續き述べてゐること。

(二) 彼れの最も有力なる祖述者や解釋者は皆彼をこの意味に解してゐること。

(三) 彼れの學說は、尠くとも一部分は、資本と勞働とを同一視せること、及び利潤と勞働に對する報酬とを同一視せること、に依存してゐること。——このことは後程彼れの祖述者に依つて完成せられ、又後の社會主義者の理論に導入つたものである。

然らばリカアドは、或る種の修正を認めたるに拘はらず、依然として勞働價值論を根柢に於て支持したるものであつて、ロードベルタスやマルクスがリカアドの價值論を當に勞働價值論であるとするのは、彼を誤解せるものであるとのマーシャルの非難の却つて當らないことを推則し得らるゝが如き證據は何處に見出すべきであらうか。私は此點に於て左に若干の檢索をして見やうと思ふ。

先づ第一に、彼れの所謂修正が詳細に取扱はれてゐる『原理』第三版第一章第四、五節に於て、彼がその修正に余りに重要を置くことの不當なることを隨所に説いてゐるのを注意すべきである。例へば彼は云ふ。

『然らば、貨物の價值の變動の原因を測定するに際し、勞働の(價值の)下落又は騰貴によつて生ぜしめられたる結果を全然考慮外に置くのは、間違つてゐるであらうが、それに甚だ重きを置くのも等しく正しくないであらう。仍て本書の以下の部分に於て、私は時としてこの變動の原因にも説き及ぶであらうが、貨物の相對價值に於て起る總ての大變動は、貨物を生産するに時々必

要なる勞働の分量の多小によつて發生するものと看做すであらう。¹⁾

『然らば社會の初期の時代にして、未だ多くの機械又は持續的資本が使用せられない時に於ては、相等しき資本によつて生産せられたる貨物は、殆んど同一の價值を有し、而してその生産により、多い又はより、少い勞働が要求さるゝの故のみを以て、相互相對的に騰貴し又は下落するであらうが、これ等の高價なるやうにして持續的な器具が紹介されたる後は、相等しき資本の使用によつて生産せられたる貨物も、甚だ等しからざる價值を有するに至るであらう。而して假令それらは、その生産により、多い又はより、少い勞働が必要となるに従ひ、相互相對的に騰貴又は下落するの傾向はなほあらうけれども、それらは、一つの他の變動——より、小さい變動ではあるが——即ち勞賃および利潤の騰貴又は下落からも影響を受けるであらう。』²⁾ (註)

(註) リカアドが、利潤、勞賃の價值變動に及ぼす影響を重要視することの不當なるを云ふのは、彼が、實際上その影響が、勞働に依つて惹起される影響と比較して、極めて輕微である、と信ずるに由る。彼曰く。

『しかしながら讀者は、貨物の(價值の)變動のこの種の原因は、その結果に於て比較的輕微なることを注意しなければならぬ。利潤に於て一バアセントの下落を惹起するやうな勞賃の騰貴を以てしても、私が假定したる事情の下に於て生産せられたる財は、相對價值に於てたいバアセント變動するのみである。即ちこれらのものは、利潤のかくの如き大なる下落を伴ひつゝも、六〇五〇磅から五九九五磅に下落するに過ぎない。勞賃の騰貴よりしてこれらの相對價值に及ぼされ得べき最大の結果も、六、七バアセントを出づることは出來ないであらう。何故なれば利潤は恐らく、如何なる事情の下に於ても、それ丈の量より大なる一般的且つ持續的の下落を許すことは出來ないであらうから。』³⁾

右に引用したる所に於て、リカアドが、以上の部分に於ては、主として貨物の相對價值の變動

- 1) Ricardo, *ibid.* p. 30. (同譯本57頁)
- 2) Ricardo, *ibid.* p. 35. (同譯本67—8頁)
- 3) Ricardo, *ibid.* p. 29. (同譯本55—6頁)

は、それを生産するに必要な労働の分量の多少に依ると看做すであらう、さある通り、彼れのこの態度はその他の部分に於て屢々現はれてゐる。例へば地代を論ずる章に於て見出される左の有名なる章句——これは彼れの差額地代の成立の基礎的命題である——もこの彼れの態度を證明するに足る一つである。

『すべての貨物——それが製造品であらうと、鑛産物であらうと、土地の生産物であらうとを問はず、——の交換價值は、常に、極めて好都合なる、而して生産の特殊利便を有する人によつて、獨占的に享受さるゝが如き事情の下に於て、それらのものを生産するに足りるであらう所の、より、少い労働の分量によつて左右せらるゝのではなくして、かゝる利便を有せざる人々に依つて、即ち最も不利なる事情——即ち所要量の生産物を得るがために生産を行ふことを必要とする最も不利なる事情——の下で、それらのものを生産し續くる人々によつて、その生産に必然的に費されたる、より、多くの労働の分量によつて左右せらるゝのである。』¹⁾

更に第六章「利潤に就て」の始めに左の詞がある。

『吾々は、穀物の價格が、地代を支拂はない所の資本のその部分を以て、それを生産するに必要な労働の分量によつて左右さるゝことを研究して來た。吾々は又、總ての製造貨物の價格は、その生産により、多くの労働か或はより、少しの労働か、必要になるに比例して、騰貴或は下落することをも研究して來た。』²⁾ (註)

(註) 同様なる意味の詞は他にもある。その一二を左に引用する。

1) Ricardo, *ibid.* p. 50. (同譯本99頁)

2) Ricardo, *ibid.* p. 87. (同譯本169頁)

『一貨物の眞實價格は、こゝではそれを生産するために使用されなければならない所の、労働および資本(即ち蓄積されたる労働)のより大なる或はより小なる分量に依存するものと正當に論述されてゐる。眞實價格は、或る人々が主張する如く、貨幣價值に依存しない。又他の人々が言ひしが如く、穀物とか、労働とか、或は個々のものとしての或る貨物とか、若くは集合體としての總ての貨物とかに對する相對價值にも、依存しない。實はマルサス氏が正當に言へる如く、それを生産するために使用されなければならない所の、労働および資本のより大なる(或はより小なる)分量に依存する』のである。』¹⁾

『若しも穀物と労働とが共に交換上の眞實價值の正確なる尺度でないとするならば、——而してこれらのものは實際そうではない——如何なる他の貨物がそうであるか?——確かに何物もそうなり得ない。然らば若しも貨物の眞實價格なる言ひ表はし方が何等かの意味を有つものとするならば、それはマルサス氏が地代に關する論文に於て論述したる所のものでなければならぬ。それは貨物を生産するに必要な資本と労働との比例的分量によつて測定されなければならない。』²⁾

『粗生々産物および製造品の價值を左右するところのその同じ一般法則が、金屬物にも亦適用される、と云ふことを注意すれば足るであらう。その價值は、利潤率や、勞賃率や、鑛山に對して拂はれる地代やによつて定まるのではなく、金屬を獲得して之を市場に齎らすに必要な労働の全量によつて定まるのである。』³⁾

この彼れの態度は、彼れの書簡集に於ても亦容易に見出される。例へば一八一九年十二月一日附マカロツクに宛てたる書信の中に左の如き文句が発見される。

『私は以前にも増して價值の大なる規制者は、評價される貨物の生産に要したる労働の分量であると云ふことを信じてゐる。勿論貨物が市場に齎らされたるに要する時間の異なる状態からして、この説に多くの修正が許されねばならないが。が併しこのことはこの説それ自身を拒否するものではない。私は、價值規制の原則に就て爲した所の説明に満足してゐるものではない。よ

- 1) Ricardo, *ibid.* p. 404. (同譯本392頁)
- 2) 蓄積されたる労働のこと
- 3) Ricardo, *ibid.* p. 409. (同譯本403頁)
- 4) Ricardo, *ibid.* p. 63. (同譯本123-4頁)

りよく筆がたつてそれをなしたならばよからうにと思つてゐる。要するに總ゆる困難を説明すべき缺點は、その説の不適當にあるのでなくして、それを説明せんと試みる人の不適任にあるのである。』

なほ吾々は左の如き章句をほかの書簡に見出す。

『度々貴下に御話し、たやうに、私は、私の爲した價值の説明には満足してゐない。何處で私の標準を決めるべきかを確と知つてゐないから。私は、貨物に實現してゐる所の労働の分量の上に、その貨物の相對價值を支配する規則を決めると云ふことに於ては、私の行方は正しい、と充分に確信してゐる。がしかし私が絕對價值の標準を決定せんとする時には、私は一年間の労働か、一月間のそれが、一週間のそれが、或は一日間のそれが、その何れを選んでよいかを決めることができない。』(註)

(註) リカアドが、利潤、勞賃に依つて惹起される價值の變動に重きを置かなかつたことを示す彼れの書簡は、さきに引用したる所の一八二二年五月一九日附マカロツク宛のものゝ外、左の如きものがある。

一八二〇年一〇月一〇日附マルサス宛——『貴下は、貨物に投ぜられたる労働の分量は、僅かの例外ある外、それらが相互に交換さるゝであらう所の比率を決定すると云ふ私の命題の根拠は充分でない、と云はれる。それが嚴格に眞ではないことは私も認めるが、私が嘗て聞いた限りに於ては、それは相對價值測定規則として、殆んど眞理に近いと、私は云ひ度い。貴下は需要供給の價值を規定することを云はるゝが、私はこの書翰の始めに述べた理由により、それは何ごとをも意味しないと思ふ。價值を規制するものは供給であつて、供給は比較的生産費に依つて支配される。生産費は、貨幣に現はされたる場合には、労働の價值および利潤を意味する。……これらの變動は如何なる原因(永久的原因を意味する)に歸することができ

- 1) Ricardo's Letters to McCulloch, p. 47—8.
- 2) ibid. p. 96.

か。それは二つの原因に、そうして二つの原因にのみ歸することが出来る。その一つの原因は、勞賃の騰貴又は下落、若くは私がそれと同じことを意味すと思ふ所の利潤の下落又は騰貴であつて、その影響は大したものではない。今一つの原因は、貨物の生産に要せらるゝ勞働の分量の多少であつて、それは極めて重要なものである。第一の原因からは、大した影響は惹起されない。と云ふのは利潤は價格の一部分を占むるに過ぎないのであつて、それが爲めに價值の大なる増減が惹起されることがないからである。ところが第二の原因に對しては界限を附することができない。と云ふのは貨物の生産に要せらるゝ勞働の分量は、二倍若くは三倍と變動することがあるからである。』

一八二三年八月二日附マカロツク宛——『貨物(の價值)がかくの如く利潤の變化のために變動する時に、貨物の生産に必要な勞働の分量以外に、他の變動の原因はないと確言するのは正しいであらうか。それは正しくない。實際上貨物(の價值)が利潤の變動に依つて變動するのはホンの僅かではある。と云ふのは利潤は一般的に極めて少しゝか變動することがないから。しかし私はそれかと言つて、若し利潤が變化するならば、貨物(の價值)も亦變動すると云ふことを認めざらんとするものではない。』

以上私は、リカードの價值論は結局如何なるものとして残つたのであるか、それは遂に一種の生産費説となり終つたのであるか、或はそれはその根柢に於て依然として勞働價值論として終始したのであるか、をその各々の解釋を容るべきが如き證據を、彼れ自身の言葉に於て見出すことに依つて、吟味したのであるが、私は、彼れの修正あるに拘はらず、彼れの價值論は依然として勞働價值論として残り、その基礎に於て結局それより離るゝことができなかったであると思ふ。彼れが自己の勞働價值論の多くの場合に於ける貨物の交換價值測定の説明として充分に堪ゆること能はざるを、主としてマルサス等との論争に依つて、漸次強く認むるに至りたることは、前述

1) Ricardo's Letters to Malthus, p. 175--6.
1) Ricardo's Letters to McCulloch, p. 178.

せる所に依り素より否定するを得ないが、而も彼はその勞働價值論の依然として價值の中心概念を成すことを信することより離れることが出来なかつたのである。そうしてこのことは、彼れの意識せるとせざるにかゝはらず、彼れの所謂修正はその實決して修正にはあらずして、價值の生産價格化、剩餘價值の平均利潤化を取扱へるものであり、彼れの價值論は實質上純然たる勞働價值論として残つたことからして、洵に自然であると云はねばならぬ。要する所リカアドに於ては、彼れの勞働價值説の不充分なることを認めんとする態度と、それに執着せんとする態度との相容れざる二つの態度が見出されるのである。而してこの彼れの曖昧なる態度に因つて來る原因は、色々の方面に之を求めることができるであらうが、その根本的な原因は、彼が、かゝる相反せる態度を裏付ける矛盾の現象は、資本家的生産方法の必然的現象であることを理解せず、價值の生産價格化の理論に迄到達することができなかつたことに求むべきである。

リカアドは明に現今の社會に於ける貨物の交換價值をそれが生産に費されたる勞働の分量により決定せんとするものであつて、それは寔に彼れのミスに勝る點であると云ふことができるに拘はらず、最後迄この態度を純粹に一貫することができなかつたのは彼が現今の資本家的社會に於ては、平均利潤率の法則の存在するがために、勞働價值はその儘個々の貨物に於て、價格に實現することなくして、それは利潤、利子、地代、及び勞賃の形をとつて現はるゝことにより、即ち異なる生産部門に於ける資本競争に因る價值の生産價格化により、價格は、價值より離れ、それは恰も一見勞働價值法則の支配を脱するが如く見ゆる、がしかし勞働價值が、たゞそののみ

が、價格の内的基本要素として總體的に究極的に、價值現象を支配することにより、資本家的生産方法の諸運動法則を制約する基本的實在たり得るものであることを、明瞭に意識することができなかつたことに因るのである。彼は、修正（その實轉形）せられたる場合に於ける（生産）價格（その本源を價值に見出すべきではあるが）と價值とは相異なれるものである、と云ふべきであつたが、その代りにそれらの二つのものは同じであると云つてしまつたのである。

勞働價值説に出發し、それを徹底的に主張する限り、當然に剩餘價值の成立、剩餘價值の利潤、利子、及び地代への轉化、剩餘價值率の平均利潤率への轉形、價值の生産價格化などの問題に到達すべきである。リカアドが勞働價值説に出發し、己にそれが結構は、勞賃と利潤との相反、價值と生産價格との離反を事實上示してゐるに拘はらず、そうして又彼は（差別的）地代の成立、勞賃の決定をその勞働價值法則に依存せしめてゐるに拘はらず、右の問題に迄その價值論を發展するに至らなかつたのは、その遠く因つて來る所の原因（彼が利潤の存在の正當を始めから自明のこととしたること、當時の社會の形態を永遠的自然的なものと信じたること、更には當時の資本家的生産關係の發達程度など）は兎も角、彼れが勞働價值の本質に對して正當なる理解なく、價值の概念と生産價格の概念とを明確に識別せず、隨つて自由競争、平均利潤率の法則の齟らす價值の生産價格の轉化、即ち價格と價格との矛盾の機構を勞働價值説に依存せしめつゝ、説明することができなかつたことに由るのである。マルクスがこのリカアドの態度を批評して、左の如く言つてゐるのは、克く彼れの態度を言ひ現はしたものであらう。

「商品の單なる價值決定から、如何にして剩餘價值、利潤、更には一般利潤率が出て來るか、と云ふことに就ては、リカアドは猶ほ朦朧としてゐる。彼が上記の例に於て示すことは、商品の價格は、それが一般利潤率によつて決定せらるゝ限り、商品の價值とは全然異なるものであると云ふことである。そうして彼がこの差別に到達するのは、彼が利潤率を法則として立てるによる。世人はリカアドの大なる抽象を非難するが、その實その反對の非難、即ち抽象力の缺乏、言ひ換へれば、商品の價值に於て、競争から生じて價值に對立する所の事實たる利潤を彼が忘却することができなかつた、といふ非難、が却つて正しいであらう。」¹⁾

結 論

以上私は、リカアドに於ける労働價值法則の妥當性に就ての問題——それは如何なる社會に於て妥當すべきものとせられたか、その上加へられた修正は如何なる意義を有つてゐるが、換言すれば修正せられたる後に残りたる彼れの價值論の正體如何、——を檢討することに依り、一方彼れの労働價值説の長所を見ると同時に、他方彼が猶ほ未だ至らなかつたところを擧げ、その因つて來るところを瞭にせんとした。即ち彼は、資本主義社會に於ける價值問題を在るがまゝに瞭にせんとして、その労働價值説を説いたのであつて、即ち労働價值が現實の貨物の交換價值の基礎であることを主張したのであつて、それは労働價值學史上寔に偉大なる功績の一に數へらるべきであるに拘はらず、彼が一種の修正を認めることにより、純粹なる形に於ける労働價值説を

1) Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. II. Teil I. S. 37

最後迄支持することができなかったのは、勞働價值論の本質に關しての彼れの未熟なる理解に由るものであつて、彼れの勞働價值論の更に一段の發展を必要とすることを物語つてゐるのである。

リカアドは、『アダム・スミスの哲學的理論と經驗的理論とは、一見々ゆるが如く、決して相矛盾するものではない、ことを示すに全力を注いだ』のであるが、彼は充分にそれを爲し遂げることはできずして、遂にその價值論は、『經驗的實在の讓歩が、哲學的出發點、即ち勞働價值法則と理論的に結合せられないといふ、致命的にして醫すべからざる缺點を有つた』²⁾ 儘殘ることゝなつたと云はれる。³⁾ そうしてそれは、彼が相矛盾せる現象を矛盾せる現象として説明し得ず、それを一の固定的なる法則により解明しやうとしたことに歸するのである。

かくの如くリカアドがその勞働價值論を本來の形に於て終り迄支持することができなかったこと、隨つて剩餘價值論を展開するに至らなかつたことは、アダム・スミスが(費消)勞働價值法則の現今の社會に於ても作用することを信するが如き口吻を漏せるに拘はらず、隨つて又剩餘價值の發現を暗示せるに拘はらず、遂にそれをすてゝ主として一種の生産費説をとるに至つたと同様に、未だ彼が勞働價值説を充分に理解して更にそれを發展せしむることができなかったことを示してゐるとは云へ、リカアドの勞働價值學說史上に於ける功績は洵に偉大である。勞働價值論はリカアドに依つて、一先づ前期の發展を遂げ終つたものと言つても過言ではない。彼れの價值論が、廣く、而して長く、價值學界に大なる影響を及ぼしたことは決して偶然ではないのである。マルクスの詞に、次の如きもの——『リカアドは最後にその間にやつて來て、科學に止れを

1) Wieser, Ger natürliche, Werth, Vorwort, v.

2) Rosenberg, a. a. O., S. 30.

3) この哲學的、經驗的なる言葉は筆者の言はんとする所に關する限り適當なる用語ではない。今はたゞ便宜上この言葉を引用するのみ。

命じる。資本家的制度の生理學の基礎若くは出發點——その内的有機的關係および生活過程の把握——は、勞働時間による價值の決定である。彼はこれから出發し、科學をして無理やりに今迄の因襲を去らしめる。そうして彼は、それが兎も角發展せしめ、説明したところの範疇——生産および交換關係——が、如何なる程度に於て、この基礎、出發點と一致してゐるか、若くは衝突してゐるか、この過程の現象形態を繰り返へし與へ、再生産する所の科學、隨つてこの現象そのものは、一般的に如何なる程度に於て、資本家的社會の内部關係即ちその實際の生理學の據つて以て立つ所の、若くはその出發點を成す所の、その基礎と一致してゐるか、この制度の外見的運動と實際的運動との衝突は一般的に如何に相關係するか、などに就て研究する。これは科學に對するリカアドの大なる歴史的重要なものである……」があるが、よくリカアドの經濟學に對する貢獻の意義を云ひ現はしたものであらう。

このリカアドの勞働的價值論、およびスミスの勞働價值論の各々の足らざる所を補ひ、その長所をとり、それを辯證法的に發展成形せしめて、自家獨特の立場から、彼れ特有の勞働價值論を仕上げることにより、それを資本家的生産方法の諸運動法則の實在的な根本的原理としたのがマルクスである。(二三、二二、八)